

ベートーヴェンとカントの美学

169720 三上香子

はじめに

本レポートは、大阪教育大学大学院教育学研究科生涯教育学組織論特論の期末課題の補助として、筆者の考えを自由に記したものである。

プラトンの時代から哲学では「美」について、様々な見解がだされてきた。しかし、自然美と芸術美の関係があきらかにされたのはカントからである。そこで、ここではカントを中心に論じていく。

1. 自然美と芸術美

(1) カントとヘーゲル¹⁾

自然美と芸術美を対比させた場合、ドイツの大哲学者カントは、『判断的批判』(1790)において、「自然美を芸術美より優位にする」としている。その理由として、「芸術美は時として虚栄心や自己中心的な主張や、墮落した情熱をまといやすく、えてして独創気取りの天才芸術家の逸脱した虚栄の影が忍び寄るからである」と述べている。

これに対して、カントの後に世に出た同じくドイツ哲学者ヘーゲルは、『美的講義』において、「芸術美のほうが自然美より高次である」としている。その理由として、「芸術美は精神から生み出され、また再生された美である」とし、自然はただ無媒介に存在するにすぎず、その根柢のうに精神が自覚的に歴史的に成形しあげたもののうちにこそ、心理は宿っている」と述べている。

(2) カントとシラー

さらにカントは、「自然美や芸術美、または崇高といった情感的・美学的な趣味判断や創作活動においてこそ、たんに自然必然的な感覚でもなく、また道徳的な善悪でもなく、むしろそれらとはまったく異なる自由な遊戯が行われてこそ、そこに「合目的性」をそなえた普遍的で調和的あり方が可能である」と、創作活動における美について述べている。

ドイツの思想家シラーは、このようなカントに感銘を受けたひとりである。シラーは、「情感に満ちた美学的な生き方こそ、人間を感性的状態から連れ出して道徳的な生き方へと移ることができる」と考えた。人間に対して、道徳的義務を命令しても容易に服従しえない。美学的な共鳴や感動を介してこそ、人間は自己形成し、教育されうると説いた。

2. シラーと第九の魅力

ドイツの作曲家ベートーヴェンは、交響曲第9番合唱つき（以下：第九）の第4楽章で、シラーの詩「歓喜に帰す」を使用した。なお、第九以前の交響曲に、合唱が用いられているものは見当たらない。このことから第九は、通常の交響曲名のあとに「合唱つき」と表記される。

なお、第九の魅力は曲の構成にある。第1楽章は弦楽器を中心とした短調の重厚な雰囲気をもつ。第2楽章は木管楽器を中心とした軽快なイメージになる。第3楽章は、木管と弦がこの世のもの

1) 渡辺二郎『美と詩の哲学』放送大学院猿教材，1999年。本レポートの1については、すべてこちらを参考にした。

は思えないほどのゆったりとした、美しすぎるメロディを奏でる。ここまでで、すでに物語は完成されているようだ。しかし第4楽章は、想像もしない物語が展開される。

第4楽章に入ると、再び第1楽章のメロディが演奏される。ところがチェロがああ有名な「歓喜の歌」の単調なメロディでそれを打ち消す。次に第2楽章・第3楽章のメロディも同様に打ち消される。第3楽章のメロディが打ち消された後、単調なメロディがすべての楽器で演奏され、一応の音楽的な解決がみられる。しかし、物語はこれでは終わらない。突然けたたましいティンパニの連打を伴い、「おお友よ！このような音ではない！」と声楽のバリトンが歌いだし、単調なメロディを伴ってシラーの詩を歌いだす。それにつれてその後にアルトなど他の声楽が歌いだし、最終的には単調なメロディを共にオーケストラを伴った大合唱で幕を閉じる。

3. 2つのベートーヴェン像

(1) ロマン・ロランのベートーヴェン像

ベートーヴェンの生涯については、多くの研究者が文献を残しているが、日本人にもっとも知られているのは、フランスの作家で理想主義者であるロマン・ロランの『苦悩の英雄ベートーヴェンの生涯』であろう²⁾。訳者の新庄嘉章は訳本に次のように記載している

音楽家としての輝かしい瞬間に、聴覚を失うという冷酷な宿命を背負わなければならなかったベートーヴェン。だが、その痛ましいまでの苦悩を、見事に《歓喜》へと昇進させた。

このように、ベートーヴェンは生涯独身を貫き、苦悩のなか作曲に人生を捧げた人物であるという人物像が、多くの人々が知るベートーヴェン像である。

(2) 滝本裕造のベートーヴェン像

ところが、このようなベートーヴェン像に異を唱える学者が日本に存在した。音楽美学学者でベートーヴェン研究家である滝本裕造は『偉大なる普通人：ほんとうのベートーヴェン』のなかで³⁾、ベートーヴェンの生涯をロランとは異なる視点から検証し、「ベートーヴェンは、言われているほど貧乏ではなかったし、自分の仕事を貫徹できた幸せな人物であった。ベートーヴェンほど幸せな人はいない」と述べている。

(3) ロランと滝本の共通点

上記2名の研究者の意見は、一見すると相反するように思われるが、書籍を読むと、どちらもベートーヴェンの生涯に関する細やかな研究をもとに、深い愛情と尊敬に満ちたベートーヴェン像をもっていることがわかる。ロランがベートーヴェンを神とし、その理想の姿を描いたのに対し、滝本は神の人間臭さを描くことで、よりベートーヴェンの人間としての素晴らしさを表現した。どちらも方向性は異なるが、人びとにベートーヴェンを知らしめようとした目的は同じであり、彼らがベートーヴェンに対してもつ感情は、同じであると推測される。

4. 日本人とベートーヴェン

(1) 日本人と第九

2) ロマン・ロラン『苦悩の英雄ベートーヴェンの生涯』新庄嘉章訳、角川文庫、1962年。

3) 滝本裕造『偉大なる普通人 ほんとうのベートーヴェン』KB社、2002年。

今年9回目を迎える「サントリー1万人の第九」は、今年も参加者を抽選で選出するなど人気を博していることから、第九は日本人にとくに親しまれているクラシック音楽であることがわかる。

日本人が第九を好む理由は、第九がもつ「楽器で演奏される音楽はどれも美ではない。真の美は人間の声にある」という第九に流れるストーリーが、日本人のわびさびに呼応しているのではないだろうか。なぜなら、和楽器は木や竹から作られる。これは、楽器そのものに個性があり、それらはいずれ朽ち果ててなくなることを意味している。同じく人の声にも個性があり、いかに美しい声の持ち主であったとしても、死によって再現は難しくなることと酷似している。

(2) 日本人とベートーヴェン像

日本人にも、ロランのベートーヴェン像が広く知られている。しかしそれは、ロランと滝本の知名度の差というより、日本人のものの考え方に特徴があると思われる。

日本人は読経に代表されるように、「わかりにくいことに価値がある」とする特徴をもつ。芸能においては、能に代表されるように、まさにわかりにくいことを美とする。なおこの「わかりにくさ」は、わかっている者同士の結束を強めることだけではなく、流派という形で文化を保存し継承する意味をもつ。これは、日本芸能が血族継承であることや、日本音楽のすべてが流派をもつことなからも想像できる。要するに日本人は、わかりにくく難しいものに価値があると判断する民族なのである。

同じくベートーヴェンの音楽も、ラズモフスキーに代表されるように演奏者泣かせの作品が多々存在し、第九のような哲学的・思想的な風合いをもつ曲が存在する。これらの音楽を日本人が楽しむ価値判断には、苦悩するベートーヴェン像が必要なのではないか。意地悪な言い方をすれば、日本人は、自分が崇高な音楽を楽しんでいると権威づけするために、滝本ではなくロランの苦悩するベートーヴェン像を信じようとしているのではないか、と筆者は考えている。

おわりに

本エッセイでは、カント・シラー・ベートーヴェンという著名人をもとに、自然美と芸術美について考察した。しかし、大事な点には触れていなかった。それは、カントがいう芸術美のなかに、音楽は含まれていなかったということである。カントは、詩人追放論に代表されるように最高の芸術美として詩をあげている。詩人のシラーが、カントを崇敬した理由はここにもある。カントにとって音楽は、下位のものであった。

しかし、そのシラーの詩をベートーヴェンは音楽で使用した。先述したように第九は「楽器ではなく声が最高の楽器である(芸術美より自然美である)」というカントの哲学を証明する背景をもつ。したがってベートーヴェンは、カントやシラーという偉人の業績をうまく取り入れて、カントが認めなかった音楽の哲学的な価値を詩より高位にさらしめたと思われるのである。

苦悩に満ちた人間が、果たしてこのような大仕事ができるだろうか。筆者は、遊び心がない人間に、このような策略(?)は不可能だと考える。通常、思いつかないであろう。なお、単に第九のこの一連の出来事は、偶然なのかもしれない。もしそうだとしたら、ロランや滝本が言うように、ベートーヴェンは神であったと思われる。